

青春  
グラフィティー

## 若手研究者に聞く②

塩苺 恵さん

洋上再生エネルギー開発系海洋利用環境評価研究グループ

## 【略歴】(しおかり めぐみ)

2009年(平成21年)3月東京大学工学部システム創成学科環境・エネルギーシステムコース卒業。2011年(平成23年)3月東京大学大学院新領域創成科学研究科海洋技術環境学専攻修士課程修了、同年4月(独)海上技術安全研究所に入所。同時に上記大学院の博士課程に入学、現在D2。1987年(昭和62年)2月生まれ。富山県出身。



海上技術安全研究所の若手研究者たちをシリーズで紹介する本欄を前号からスタートしました。2回目に登場していただくのは、洋上再生エネルギー開発系の海洋利用環境評価研究グループに所属する塩苺恵さんです。昨年4月に海技研に入所すると同時に、東京大学大学院新領域創成科学研究科海洋技術環境学専攻博士課程に進学。学生と社会人の二束の草鞋(わらじ)を履いていることになり、毎日「ひたすら忙しくて日々の業務をこなすのが精一杯」とこぼしますが、インタビューの間は終始笑い声が絶えず、明るく元気に答えていただきました。  
(聞き手:石井亜弥広報係長)

## 慎重な完璧主義者

—塩苺さんはどんな子供でしたか。

塩苺 小さい頃からバカがつくほどまじめな子供で、先生が言ったことからの逸脱は許せないタイプでした。先生がこう言ったんだから、こうしなきゃいけないんだと素直に従っていました。今でも根本的には変わっていませんが、子供の頃から真面目で几帳面な完璧主義

者だったと思います。通信簿にはよく責任感が強いとか、粘り強いとか書かれていましたね。あとはすごく心配性で、寝る前に忘れ物がないか、何度もランドセルの中身を確認し、布団に入った後も心配になってもう一度玄関に置いてあるランドセルまで確認しに行ったり(笑)。

—すると、勉強もよくできる優等生タイプだった?

塩苺 心配性ということもあって、何事も時間をかけ

てじっくり慎重に取り組むタイプの子でしたから、試験の終わりかけにはいつも時間が足りなくなって慌ててました。でも時間配分というものがうまくできるとなると、最初から「飛ばす」ということもできるようになりました。ただし、慎重なので、試験時間ぎりぎりまで何度も見直してましたし、途中で分からなくて抜かした問題も最後の1分1秒まで諦めずに考えるタイプでした。先生にとっては「真面目で大人しくて勉強もできる良い子」という感じだったと思います。

——ご両親にとってもそうだったのではないですか。

塩莉 確かに宿題もちゃんとやる子供でしたから、そういう意味では良い子でしたが、父親からは「学校の勉強よりも大事なことはいっぱいある。今、学校で習ってることなんて、世の中に出たらほとんど役に立たないんだ」とそれこそ耳にタコができるほど言われ続けてきました。父は、世の中で一番大事なことは倫理と道徳、それから生活力だと常に私たちに言い聞かせていました。生活力とは、炊事や洗濯などの家事ができることはもちろん、情報化社会といわれる世の中で情報をうまく利用して損をしないこととか、人に騙されないための観察力や判断力とか、モノを買う際によりよいモノを選んで見極める力のことで、そういう力の方が学校の勉強なんかよりよっぽど大事なんだ、と。だから親に「勉強しろ」と言われたことは一度もないですし、むしろ、のんびり屋の私はいつまでも宿題をやっているの、「早く寝ろ！勉強なんかせんでいい！」とよく怒られていました。だけど真面目な優等生の“塩莉さん”は先生が出した宿題を完璧にやらなきゃ気が済まないわけで、今では父の言うことも正しいとは思いますが、その時はすごく反発していました。

——クラブ活動のほうは？

塩莉 小学生の頃はスイミング・スクールに週1度のペースで通っていたほか、高学年になってからは町内対抗のビーチバレー大会のメンバーとして出場していましたが、基本的に運動は苦手意識が強かったです。その頃は学校が第2・第4土曜日が休みだったので、地域の公民館で行われる手芸教室や茶道教室に通っていました。それもあって中学では茶道部に入りました。高校生の頃はスイミング・スクールに行く回数を週5日ぐらいにして、学外活動として許可をいただいています。

た。また、高校の茶道部は中学とは流派が違っているので、中学の時に教わっていた茶道の先生のお宅が近所だったため、ご自宅に通っていました。

——高校では文系、理系のクラス編成があると思うのですが、やはり理系を選んだのですか。

塩莉 2年生になる前に文系、理系を選択するのですが、わたしのクラスはたまたま約3分の2が理系志望でした。学校側としては半々に調整する必要があり、どの科目もある程度できた私は、担任の先生に文系を勧められました。その時は将来の目標が定まっていたわけでもないし、特に苦手な科目もなかったの、先生の勧めるままに「文系でもいいかな」程度の軽い気持ちで文系に進みました。

## 絶対に理転してやる!!

——大学は工学部ですよ。すると、文系クラスから東京大学の理Iに入ったのですか。

塩莉 いや、入学時は文科Ⅲ類です。進路については学校側と父親がかなり揉めたのですが、具体的に何かをしたくて文Ⅲに入った訳でもなく、ただ高校の先生に勧められるまま受験して奇跡的に合格しちゃったんです(笑)。ただ、先生の言いなりでは悔しいので、入学時から「進学振り分けで理転して見返してやる!」と思ってました。

——その時、既に工学部に進もうと思っていたのですか。

塩莉 いえ、具体的には何も。大学2年になると進学振り分けがあって、文系から進める理系の学部・学科の中から興味のあるものをいくつかピックアップしてガイダンスに参加しました。小学生の頃から地球温暖化や環境問題に関心があって、その分野の問題解決に貢献できる人になりたいと思っていたので、工学部システム創成学科の環境・エネルギーシステムコースに進むことに決めました。そこは海洋、原子力、地下水など環境・エネルギー問題を幅広く学べる学科だったので、これは自分にぴったりだな、と。ただし、文系からの枠はわずか1名でしたから、成績がよくなければなりません。

——それでも頑張って希望どおりの学部学科に進学できた。話を聞いていると、小学校から大学まで一貫して挫折なき人生という感じですが(笑)。

塩荊 いや、そんなことはないですよ。高校の頃は心身ともに病んでいて、本当に辛い3年間でした。保健の教科書に過敏性腸症候群のことが書かれていて、試験前にそれを読んだ時は「あっ、これ、私のことじゃん!」と思ってました。卒業した瞬間に治りましたけど(笑)。

——大学の卒論テーマはやはり海洋エネルギーだったのですか。

塩荊 その頃はまだ環境問題全般に対する漠然とした、広くて浅い関心でしたから、そこまで絞り込んではいませんでした。実際に卒論のテーマに選んだのは伊豆諸島の一つ、新島の地下水に関するものです。新島は西暦886年の海底火山の噴火による堆積物でできた島で、離島では珍しく地下水資源が豊富なため、新島村民の生活用水として使われています。ただ、海岸浸食が激しいので地下水資源量への影響が懸念されています。そこで島の断面をモデル化し、地下水資源量のシミュレーションを行うことで、海岸浸食による地下水資源量への影響を評価しました。ちなみに4年生の11月まで柔道に明け暮れていたため、卒論の締め切り前は大変で、最後の3日間ほとんど寝る時間がなく、提出直後にデスクで6時間一度も起きずに爆睡してしまいました(笑)。

## 海洋基本法が進路を決めた

——その頃、大学院への進学は既に決めていたのですか。

塩荊 そうですね。卒論の時の研究室にそのまま進学することも選択肢の一つとして考えていましたが、もっといろんなことをやりたいという気持ちの方が強かったです。ちょうどその頃、海洋基本法が施行され、海洋基本計画で大学での海洋教育に力を入れていく方針が盛り込まれました。それに応える形で東京大学大学院の新領域創成科学研究科に「海洋技術環境学専攻」ができたのが大学4年の時でした。その専攻のパンフレットを読んで「これからは海の時代かな」と思って、海のほうに行こうと決めました。

——海洋基本法の施行は2007年7月ですが、それが塩荊さんの進路を決めちゃったわけですね(笑)。

塩荊 そうですね。実際、それまでは船にもほとんど興味ありませんでしたから(笑)。

——修士論文のテーマは何でしたか?

塩荊 修士の時は、海洋深層水を使った海域肥沃化効果の検証を行いました。卒論の時と近いのですが、今度は新島ではなく伊豆大島で(笑)、深層水を使った実験をやって、表層水だけの場合と比べ、水槽中のプランクトンが増えるかどうかを調べていました。その実験をシミュレーションで再現し、肥沃化効果を検証しようという感じです。詳しくは、私の名前で検索していただければ論文もすぐ見つかると思うので、ご興味があればどうぞ(笑)。

——大学院の修士課程を終えたのが2011年3月。そして、そのまま博士課程に進む一方、海技研に研究者として就職されたわけですが、海技研の存在は前から知っていたのですか。

塩荊 初めて知ったのは、修士課程1年目の時です。秋に柏キャンパスで一般公開が行われるのですが、その際に会社説明会が開かれ、そこで初めて海技研の名前を知って少し興味を持ちました。それから1カ月半後の12月半ば、東大大学院工学系研究科の末岡英利先生に引率されて海技研の施設見学に参加する機会がありました。しかし、それ以降も就職先については「海洋」という方向性は出ていたものの、造船会社や国家公務員、博士課程進学という選択肢を含め、いろいろと迷っていました。結局3月になってようやく進路を決め、海技研への応募をやめることにしました。結果、国家公務員になろうと決めたのですが、今年の試験には間に合わないから一旦進学して来年受験かな?と思っていた時、運航・物流系長の田村兼吉さんから突然、メールをいただいたのです。

——田村系長とはメールをもらう前に面識があったのですか。

塩荊 いえ。それまでのリクレーターとは別の方だったので、突然のメールでびっくりしました(笑)。その後、直接お会いする機会をいただき、本省と海技研の違いを詳細に伺った上で、とりあえず海技研の採用試験に



応募してみてもどうかと勧められました。実際、応募書類を送り、試験を受けて内々定もいただいたのですが、本当にとりあえず受けた形だったので、その時点でもまだ博士課程への進学や公務員試験の受験も考えており、内々定をいただいたからといって就職しようと決めたというわけでもなかったのです。

——結局、二束の草鞋(わらじ)を履くというか、海技研と大学院博士課程の両方を選ぶことになったのは。

塩莉 柏キャンパスで田村さんと研究室の先生を交えて三者面談を行いました(笑)。その結果、博士課程にも進学し、海技研にも就職するということが話が進みました。国家公務員になるのをやめたのは、田村さんのお話を伺っているうち、本省よりも海技研の方が子育てなどもしやすいと感じ、将来のことも考えると海技研の方が良いのかなと思ったからです。

——同じ女性から見ると、すごいパワーを感じます。海技研に就職して1年以上が経つわけですが、心境はいかがですか。

塩莉 今はひたすら忙しくて日々の業務をこなすのが精一杯、という感じです。が、成果が目に見える形になると、達成感というか、充実感を覚えます。去年は風車の設計に関する英語文献の調査を任されたのですが、就職するまで風車についてほとんど知りませんでしたから、どこが重要でどこが要らないとか判断するのが大変で、要約するのに苦労しましたね。でも成

果をA3・14ページの一覧表として仕上げ印刷した時の達成感は半端じゃなかったです(笑)。とはいえ、今年度はもっと忙しくなるので、昨年度は今に比べればかなり暇だったなあと思います。昨年に引き続き、重点研究の一つ、洋上再生エネルギー施設の環境負荷に関する研究に取り組んでいて、洋上風力発電施設からの水中放射音の計測と音場シミュレーションによって環境影響評価手法の構築を行うのですが、1年間でどこまでできるのか、不安もあります。しかし、注目されている分野なのでやりがいがありますし、頑張っ取り組みたいです。

——仕事以外の時間はどのように過ごされていますか。

塩莉 大学時代は柔道部に入っていて、実は勉強よりも柔道に明け暮れていたんですけど、今はやっていませんね。最近は修士課程2年次から覚え始めた、山口百恵や中森明菜の主要ヒット曲を振り付け付きで歌ったりしています(笑)。

——どうやって覚えるのですか。

塩莉 自分の部屋で昔の歌番組のビデオ映像をチェックしながら歌って踊って……(笑)。

——それはすごい! これを読んだ百恵ファンや明菜ファンだった所内外のおじさんたちから出演依頼が殺到して大変なことになりますよ(笑)。きょうはありがとうございました。